

研究ノート

Histoire de Babar 『ぞうのババール』をめぐって ——ふたつの版、翻訳、教材として——

堀内ゆかり

0. はじめに

「フランス語ができるようになったら何をしたいですか?」、と毎年初回の授業アンケートで学生にきいている。「旅行に行ったときに使ってみたい」「フランス語圏の人と話してみたい」という答えとともに、数は多くないがかならず「絵本を読みたい」という声がある。これをきっかけに、教材として使えるようなフランスの絵本を探してきた。

『星の王子さま』を挙げる学生も時々いるが、この本のフランス語は意外とむずかしい。紆余曲折¹を経て『ぞうのババール』にたどり着いた。

本稿では『ぞうのババール』の原書および日本での翻訳について、この本を教材として使う実践について述べていきたい。

1. ジャン・ド・ブリュノフ 『ぞうのババール』

1.1 *Hisotoire de Babar* (1931) (「ババールのお話」、邦題『ぞうのババール』) はババールを主人公とするシリーズものの第1作である。絵と文の両方を手掛けたジャン・ド・ブリュノフ (1899-1937) はババールの絵本を生涯に7冊発表し、37歳の若さで結核のため亡くなった。その後、息子ロランが引継ぎ、2011

1 文具などキャラクターグッズが流通していて学生になじみがあるものとしては『リサとガスパー』や『バーバパパ』などがあるが、教材としては物足りない。ピエール・グリバリ、グレゴワール・ソラレフはクセが強く、学生の好みが分かれる。

年の時点で75タイトル、世界36の国・地域で27の言語に訳されている²。2011年には80周年を記念する展覧会がパリ装飾美術館とフランス国立図書館で開催された。

この本が誕生した経緯はよく知られている——ジャンの妻セシルがある晩、5歳と4歳の息子たちに、即興で語って聞かせた物語がもとになっている。ジャングルでハンターに母親を殺された小さな象が人間の住む街にいく、という話が気に入った子供たちは翌朝、父であるジャンに話してきかせ、ジャンがそこからインスピレーションを得て物語に仕上げた。息子たちを喜ばせようと、手作りの絵本を作り、それが家族や友人のあいだで評判になる。

1.2. ジャン・ド・ブリュノフの父モーリス・ド・ブリュノフは、ディアギレフのパレエ・リュスのプログラムなど美術書の出版していた。ジャンの兄のひとりには父の後を継ぎ、もうひとりの兄ミシェルはパリでヴォーグの編集長を長年つとめた。ジャンの義兄リュシアン・ヴォーゲルはファッション誌 *Gazette du Bon Ton* や *Le Jardin des Modes* の編集長をつとめ、のちに初の写真によるニュース誌 *Vu* を創刊する。「一族がみな辣腕の編集者という雑誌ファミリー」³ という環境で育ったジャンは末っ子で画家になることだけを考えていた。手作りの「ババールのお話」の絵本を読んだ家族から出版をすすめられ、義兄の雑誌社 *Jardin des Modes* から出版されることになる。

1930年夏に母が息子たちに聞かせた象の話は、このような家族の後ろ盾もあって翌1931年に *Histoire de Babar* (邦題『ぞうのババール』) が出版され、1932年に *Voyage de Babar* (『ババールのしんこんりょこう』)、1933年に *Roi Babar* (『おうさまババール』) が出版される。

1933年、*Histoire de Babar* は国境を超える。英国では『くまのプーさん』の

2 François Bistnavaron, «Babar, 80 ans et toujours vert», *le Monde*, 8 décembre 2011.

https://www.lemonde.fr/vous/article/2011/12/08/babar-80-ans-et-toujours-vert_1615110_3238.html

3 鹿島茂、「フランス絵本の世界」Ⅴ章「フランス絵本の人気シリーズ」, p.171, 2017年, 青幻社。

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐる ―ふたつの版、翻訳、教材として― (堀内ゆかり)

著者 A.A. ミルンの序文つきで英語版が出版され、同年、米国でも出版される。1936年、ババールの絵本の著作権は le Jardin des Modes から配給網をもつ大手出版社の Hachette 社へ譲渡されている。

ジャン・ド・ブリュノフは1937年に亡くなり、全部で7冊⁴のババールの本を残している。

1.3 私が最初に授業で教材として使用したのは、フランスで出版されている小型の廉価版⁵ (以下「絵本版」と略す) である。後述するとおり、ほどよい難度でテキストに適しているのだが、問題は文字が活字ではなく手書き風の筆記体であることだった。これは絵と文に一体感をもたらすためなのだが、筆記体の解読に苦勞する学生もいた。

その後、教科書会社のカタログで、購読の授業用テキストの存在を知った。安東次男編、Jean de Brunhoff, *Histoire de Babar — le petit éléphant —*、『仔象のババール』(1962年初版、第三書房、以下「教科書版」と略す) である。入手してみて驚いた。同じタイトルだから当然同じテキストかと思いきや、教科書版のほうが内容が詳しく、長いバージョンだったのである。

これらふたつの版は、どちらが先に存在したのか? つぎの2章で、ふたつの版の内容を詳しく比較したのち、3章では、なぜふたつの版があるのかという〈謎〉を解明していきたい。

2. Histoire de Babar ふたつの版

2.1 絵本版と教科書版

まず文章以外の要素から見ていこう。絵本版は15×19cm、全ページカラーで、全ページに絵がある。見開き全体を絵が占め、文章は数行だけということもある。

4 *Histoire de Babar, Le Voyage de Babar, Le roi Babar, ABC de Babar, Les vacances de Zéphir, Babar en famille, Babar et le père Noël.*

5 価格は5ユーロ、Librairie Hachette /L'école des loisirs,2016

全58ページで、テキスト部分は45ページである。一方、教科書版は白黒のA5版で、半ページほどのサイズの挿絵が全体で5点。注と動詞の活用表を含め全体で46ページである。ふたつの版のテキスト部分のページ数はほぼ同じだが、文章の量は教科書版のほうが多く、1.5倍程度である。

ふたつの版のストーリーは同一である。森でハンターに母親を殺された仔象のババルは、ハンターから逃げて街にたどり着き、大金持ちの老婦人と出会う。老婦人の家で暮らしてしばらくたったとき、たまたま街にきた従兄弟の象たちと再会をきっかけに森に帰り、象の国の王様になる。

文章に関しては、絵本版の文章はすべて教科書版に含まれている。絵本版が教科書版の抜粋であるとも考えられるし、あるいは逆に教科書版が絵本版を増補したものであるとも考えられる。この点について考察する前に、絵本版の文章で使われているフランス語について、教材としての観点から見ていく。

2.2 教材としての絵本版

この本を教材として使用する際の対象は、「中級リーディング」クラスの学生である。未修外国語、いわゆる第二外国語では、1年目の初級で文法を中心とした「ベーシック」と、実践を学ぶ「コミュニケーション」の2コマを履修し、2年目は、学部学科によって異なるが中級に進むことを希望する学生が「リーディング」と「中級コミュニケーション」の両方または一方を履修する。

絵本版の *Histoire de Babar* で使われている単語は基本単語、時制は現在形が中心で、初級文法を終えたばかりの学生にも読みやすい。かといって簡単すぎるわけではないことは、以下の原文の引用からおわかりいただけると思う。

まず語彙から見ていく。絵本版では、基本単語ではない特殊な語はごくわずかである。ババルがデパートに買い物に行く場面で、エレベーターの係員を指す語〈groom〉[若いボーイ]と、ババルが買う〈guêtre〉(ゲートル)だけである。Au pays de Babar (p.35) でも、この二つの語が時代を感じされる語で今は使われない語として挙げられている。だがこれ以外は、日常的によく使う、初学者にとっ

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐって —ふたつの版、翻訳、教材として— (堀内ゆかり)

て〈覚えて損のない〉単語ばかりである。

時制に関しては、現在形が中心である。しかし「絵本」と聞いてイメージするような幼児向けの単純な文ではなく、比較的短いテキストのなかにさまざまな時制、文法事項、初心者がまちがいやすい用法が揃っている。

Dans la grande forêt, un petit éléphant est né. (être を助動詞とする複合過去、p.7)

大きな森で、小さな象が生まれました。

Babar a grandi. (avoir を助動詞とする複合過去、p.8)

ババールは成長しました。

Babar se promène très heureux sur le dos de sa maman. (代名動詞、p.10)

ババールは母象の背に乗って、幸せに散歩しています。

Je voudrais bien avoir aussi un beau costume... (語気緩和の条件法現在 p.14)

ぼくもすてきは服がほしいなあ。

Babar va dîner chez son amie la vieille dame. (aller + 不定詞、～しにいく p.22)

ババールは友人である老婦人の家に夕食にいきます。

Un jour pendant la promenade, il voit venir à sa rencontre deux petits éléphants tout nus.

(知覚動詞+不定詞、～が～するのを見る p.29)

ある日のこと、散歩しているとき、はだかの象が2頭、こちらに向かってくるのを見ます。

Quand reverrai-je mon petit Babar ? (単純未来 p.37)

私のかわいいババールに、いつまた会えるのかしら？

Vive le roi Babar! (接続法 p.42)

ババール王ばんざい！

Et c'est ainsi que Babar devint roi. (直説法単純過去、歴史的事実をあらわす p.42)

こうしてババールは王さまになったのでした。

ここに挙げた例は、いずれも大学の初級文法の教科書で学習する範囲に含まれている。接続法と直説法単純過去の最後の2例については、文法の難度を低くしようという配慮から補遺等として扱われることもある。

初級者がまちがいがしやすい用法や表現も以下のとおり用いられている。

Que de choses nouvelles ! (感嘆文 p.14)

すべてが新しいものばかり！

Il trouve si amusant de monter et de descendre dans cette drôle de boîte, qu'il monte dix fois tout en haut, descend dix fois tous en bas. (trouver, si que, p.16)

ババールは、この奇妙な箱に乗って登ったり降りたりするのがとても楽しいと思ったので、10回てっぺんまで行き、10回下まで降ります。

Il allait continuer quand le groom de l'ascenseur.... (近接未来 aller が過去時制になるとき p.16)

ババールが [エレベーターで遊ぶのを] つづけようとしていると、そのときエレベーターボーイが…。

Elle le trouve très chic dans son costume neuf. (trouver ～を～だと思ふ p.22)

老婦人は、新しいスーツを着たババールをとってもシックだと思います。

Tous les jours il se promène en auto. C'est la vieille dame qui la lui a achetée. (p.25) (c'est ～ qui 強調構文、複合過去における過去分詞の一致)

毎日、ババールは車でドライブにいけます。老婦人が買ってくれたのです。

Heureusement, en volant sur la ville, un marabout les a vus. (pp.32-33) (ジェ

ロンディフ、複合過去における過去分詞の一致)

幸運なことに、ハゲコウが、街の上を飛んでいたとき、彼ら [ババールと従兄弟] を見ました。

S'il n'avait pas le chagrin de la laisser, il serait tout à fait heureux de partir. (条件法現在 p.36)

もし老婦人を残していく悲しみがなければ、ババールは出発が心底うれしかったことでしょう。

Il lui promet de revenir. (間接話法 p.36)

ババールは老婦人に、戻ってくることを約束します。

《Je vous remercie tous, dit alors ce dernier, mais avant d'accepter, je dois vous dire que.....》

「みなさん、ありがとうございます」、ババールは言います。「でも、お引き受けする前に、みなさんに申し上げておきたいことがあります」(ce dernier の用法、直接話法の会話文における話者の示し方、p.42)

この最後の例には、学習者にとって難しいポイントがふたつある。ひとつは ce dernier の用法で、直前の人物を指し、「それ、その人、後者」の意味になることである。もうひとつは、会話文における話者の提示方法に関する日本語とフランス語のちがいである。日本語では直接話法の場合、会話は鉤括弧で括られ、話者は鉤括弧の外、鉤括弧の前か後で示されるが、フランス語の場合は鉤括弧の代わりにギユメ « » が用いられ、話者はギユメのなかに組み込まれ、動詞と主語が倒置されて示されることがある、という点である。

絵が中心の 48 ページのテキストに、これだけ多様な表現が含まれている。学習者はこれらの文の解釈を、物語のシンプルな文脈のなかで考えることができ

る。これが絵本版のメリットである⁶。

2.3 冒頭の比較

つぎに絵本版と教科書版の文章の相違点を、冒頭の比較を一例として見てみよう。

「大きな森で小さな象が生まれました。名前はババール。母さん象はこの子が大好きです。

ゆりかごを鼻でゆすって、くちずさみながら、やさしくねかしつけています」⁷、ふたつの版はこまではほぼ同じで、このあと教科書版では、森の動物たちが象の赤ちゃんを見にきて口々に褒める場面が続く。

森の住民たちがみんなババールを見に、母象を祝福しにやってきます。

「なんてかわいい赤ちゃん象なんだ！」

「肌がつやつやだ！」

「賢そうな額だ！」

それはまさに、口を揃えての賛辞で、母象は誇らしく思います。残念なことに、訪問客がこうした賛辞を述べたのはババールが眠っているときでした。ババールは空腹で突然目覚めると、森じゅうに響くような大声で泣きはじめます⁸。

6 教科書として使用する際の絵本版のデメリットとしては、前述のとおり筆記体で書かれていて、Donnons -lui la couronne. が Donnons lui la couronne. (ババールに王冠を与えようではないか、p.42) となっていたり、句点 (.) の代わりに (.) が用いられて学生が戸惑うことである。

7 Dans la grande forêt, un petit éléphant est né. Il s'appelle Babar. Sa maman l'aime beaucoup. Pour l'endormir, elle le berce avec sa trompe en chantant tout doucement. (絵本版 p.7、教科書版 p.1)

8 Tous les habitants de la forêt viennent voir Babar et féliciter sa maman.

— Quel adorable petit éléphant !

— Sa peau est toute lisse !

— Il a le front intelligent !

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐって ―ふたつの版、翻訳、教材として― (堀内ゆかり)

つづくババールの母親が猟師に撃たれる場面でも、教科書版では、母象がいつもババールをおんぶして鳥や花の名前を教えていたこと、猟師に撃たれるのは、ひげのある魚のお話しをしていたときのことだった (教科書版 p.2)、というような細部が語られている。

教科書版の文と絵本版の絵の一致

教科書版と絵本版の関係の二つ目は、教科書版の文章と絵本版の絵のあいだに一致が見られることである。通常、絵本では一冊の本のなかで文で書かれていることと絵は対応しているが、そういう意味ではない。絵本版と教科書版という2冊の別の本のあいだに対応関係があるのだ。

例をあげよう。絵本版では、見開き2ページ (pp.8-9) を使って31頭の仔象の遊ぶ姿が細かく描き込まれていて、文はわずか4行である。それに対し教科書版では「鼻で、大きな象の尻尾につかまったり」「川で水浴びしたり」「水かけ戦争ごっこをしたり」「砂場でお城をつくって貝殻で周りに堀を作ったり」と書かれている⁹。絵本版の絵をあらためて見ると、そこには実際にこうした遊びをしている象の姿がある。

教科書版の文と絵本版の絵が一致しているケースは、服装や食べ物についての記述でも見られる。ババールがデパートでいとこたちに服を買う場面、いとこたちが「水兵の服と赤いポンポンのついたベレー帽と水玉模様のワンピース¹⁰」を

C'est un véritable concert de louanges et la maman se sent toute fière. Malheureusement les visiteurs font ces commentaires pendant le sommeil de Babar. Celui-ci se réveille tout à coup parce qu'il a faim et se met à pousser des hurlements qui résonnent entre les troncs des arbres. (教科書版 p.1)

9 Il suit les plus grands en les tenant par la queue, [...] Vraiment on ne s'ennuie pas dans la grande forêt. La baignade dans la rivière est un jeu merveilleux. S'asperger, nager, plonger.... Ah! les batailles au jet d'eau! (教科書版 p.2)

ババールはお兄さん象の尻尾につかまってついてゆきます。[...] 本当に大きな森では退屈することはありません。川での水浴びはすばらしい遊びです。自分に水をかけたり、泳いだり、もぐったり……それから水かけ合戦!

10 Arthur choisit un costume marin avec un béret à pompon rouge, Céleste une robe à pois. (教科書版 p.18)

選ぶ、と書かれていれば、絵本のほうでもその服を着た姿が描かれている（絵本版 pp.30-31）。

ケーキ屋に行く場面では、絵本版にはブリオッシュらしきパンがテーブルにあり、エクレアを食べている絵がある（絵本版 pp.30-31）。教科書版には、「食いしん坊のアルチュールは、大きなブリオッシュを独り占めします。三頭はコーヒー味のエクレアと、ババ・オ・ラムを味わいます」と書かれている¹¹。

ババールの戴冠式の場面では、絵本版の絵 p.47 は、「王様はオコジョの白い襟つきの赤いピロードのケープを纏い、威厳がある」という教科書版の描写のとおりである¹²。

設定が異なるケース

絵本版と教科書版で、話の設定が少し異なっているケースもある。それは、ハンターに追われて人間の住む街に逃げてきたババールが、人間の着ている服に興味をもつきっかけについてである。絵本版の設定では、オペラ座の前に立っている正装のふたりの紳士を見て、ババールは自分も服が欲しいと願う。その様子を見ていたお金持ちの老婦人がババールの気持ちを察して、ババールに財布を渡しデパートに行くよう促す（pp.14-15）。一方、教科書版では、紳士たちは登場せず、老婦人とババールのあいだに以下のやりとりがある。まず老婦人が犬の散歩中にババールを見つけ会釈をする。ババールは「ボンジュール、マダム」と礼儀正しく挨拶を返し、「すてきな服ですね。ぼくもこういう服がほしいのですが。それにはどうしたらいいのですか？」と尋ねている。（教科書版 p.6）

ババールはデパートで服を一揃い買い、老婦人の家を訪ねる。絵本版では、ババールがいきなり老婦人の家を訪ねていくことになるが、教科書版では、お財布を渡すとき老婦人は「買い物かすんだら私の家にいらっしやい。オペラ通

11 Le gourmand, il (=Arthur) prend une énorme brioche pour lui tout seul. Tous les trois savourent avec délice des éclairs au café et des babas au rhum. (教科書版、p.18)

12 Le roi est imposant dans sa belle cape de velours rouge à col d'hermine. (教科書版 p.27)

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐって ―ふたつの版、翻訳、教材として― (堀内ゆかり)

りの角、玄関の上にバルコニーのある家よ」といい、家の目印を教えている(教科書版 p.6)。実際、絵本版では老婦人の家のバルコニーの絵に描かれている(絵本版 p.37)。

絵本だけを読んでいるときには、なぜババールは老婦人の家の場所がわかったのか?という疑問は抱かないが、教科書版を読むと、教科書版のほうが話の辻褄が合っているように感じられる。

因果関係—なぜ算数の勉強をすることになったか

ババールは老婦人の家で生活するようになり、老婦人はババールに自動車も買い与える。絵本版ではドライブの場面に、ババールが算数の個人授業を受けている場面がつづく。ドライブと算数の授業の関連についてはとくに説明はない。

教科書版には、なぜババールが算数を勉強することになったのかわかるエピソードがある(教科書版 p.13)。要約は以下のとおり——ババールは毎日、田舎にドライブにいき、ヤギの世話をしているシルヴィーという名の少女と知り合い、車に乗せてほしいと頼まれる。ババールは有頂天でシルヴィーとドライブに出かけるが、帰宅が遅くなり、シルヴィーは母親から、ババールの車に乗ることを禁じられてしまう。落ち込んだババールに老婦人は言う。「標識石(マイルストーン)で距離がわかり、時計が読めて時刻がわかれば、こんなことにはならなかったわ。勉強してみる?」ババールは、ぜひ勉強したいと答え、家庭教師が家に来ることになる。

絵本版のドライブの場面を見てみると、そこにはたしかにヤギと一緒にいる女の子の後ろ姿が大きく描かれている(絵本版 pp.24-25)。

教科書版には、上記の例に加え、老婦人が控えめな性格であることや、ババールの失敗談として、スープを鼻で飲もうとして老婦人からスプーンを使うよう教えられること、お風呂を水浸しにしてしまったことなどのエピソードもある。

教材としての教科書版

教科書版は、絵本版と比べて内容が詳細なので、それに対応して使われてい

るフランス語の難度もあがっており、適切な箇所に編者による注が付されている。

Tous les habitants de la forêt viennent voir Babar et féliciter sa maman.
(形容詞 tout の用法。tous les habitants 住民全部、viennent voir 見に来てくる、p.1 注あり)

森の住民全員がババールを見に、そして母象を祝福しに来てきます。

Sa peau est toute lisse. (副詞 tout の用法、p.1 注あり)

この子の肌はほんとうにすべすべだ。

Pourtant il ne peut s'empêcher de trotter encore plus loin. (ne のみの否定 p.4)

それでもババールはもっと遠くへと走りつづけます。

Quand vous serez prêt, vous viendrez me voir chez moi. (命令の語意を和らげるための直接法単純未来、p.6 注あり)

身支度ができたら、私に会いに家にいらっしゃい。

La vieille dame lui noue une serviette autour du cou pour qu'il ne fasse pas de taches sur son beau costume. (接続法 p.10 注あり)

すてきなスーツにシミをつけないよう、老婦人はババールの首にナプキンを結びます。

C'est une grosse émotion pour lui de voir ses tantes. Ne serait-ce pas l'occasion de rentrer dans son pays ? Pourquoi ne pas repartir avec les autres ? Il reviendrait voir la vieille dame plus tard, sûrement. (自由間接話法 p.20)

叔母たちに会ったことでババールの気持ちは大きく揺れます。故郷に戻る良い機会ではないか？ みなと一緒に帰るのがいいのでは？ 老婦人に会うために、また必ずや戻ってこよう。

3. ふたつの版の〈謎〉

こうして *Histoire de Babar* の絵本版と教科書版を2つのクラスで教材として使い、1年間、学生と一緒に読んできた。2章で見たとおり、教科書版の文章は奇妙なことに、絵本版の絵と一致していた。ふたつの版の並べるたび、なぜふたつの版が存在するのか、ふたつの版にはどういう関係があるのか、どちらの版が先に書かれたのか、疑問は深まる一方だった。

教科書版には编者による「まえがき」等もなく、手がかりは少なかった。1ページ目のコピーライトの表示は以下の通りであり、原著の出版年の記載もなかった。

*Le premier chapitre intitulé “Histoire de Babar” de l’ouvrage de J. de BRUNHOFF : LES AVENTURES DE BABAR. Copyright “Librairie HACHETTE” Distribué par “Presse-Avenir”*¹³

両方を読み比べたとき、教科書版の方が内容が詳しいことから、教科書版の文章を取捨選択して絵本版ができあがっているという印象を受けた。そのことからまず、教科書版のほうが絵本版よりも先に書かれたという仮説に基づき、年代を遡って検討してみることにした。

3.1 電子版の存在

1章で書いたように、手元にある小型の絵本版は1979年刊である。そこで *Histoire de Babar* の初版本（1931年）にあたってみることにした。初版本はフランスの国立図書館電子サイト Gallica で電子版が公開されている¹⁴。初版本は、

13 ジャン・ド・ブリュノフによる『ババルの冒険』という本の第1章 *Histoire de Babar*。著作権アシェット社、配給プレス・アヴニール。

14 *Histoire de Babar : le petit éléphant* / Jean de Brunhoff ; .- Editions du Jardin des Modes, 1931.
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k96582907/f2.item?lang=EN#>

37x27の大型版で、表紙はオレンジ色で、タイトル、著者名を記した看板をババールが担いでいる絵が描かれている。全ページカラーで、ページ割、テキストも、授業で使った小型の絵本版と同一だった。サイズ（初版本は縦37センチ、廉価本は縦19センチ）と版元のほかは相違はなかった。

さらに、*Histoire de Babar*の初版出版の前にジャン・ド・ブリュノフが作成した見本版マケット（以下「マケット」と略す）が残っており、ジャンの息子たちからアメリカのモルガン・ライブラリー&ミュージアムに寄贈され、その電子版¹⁵も公開されていることもわかった。このマケットは、手作りではあるが自分の子供のための自家用絵本という性質のものではなく、出版される本の準備段階として作られており、これが推敲されて完成版となる。

ここまででわかったのは、授業で使った廉価版の絵本は、サイズ以外の点では初版本と相違はなく、テキストもページ割も同一であることである。そして、マケットから決定稿にいたる推敲の過程は、文章は「よりシンプルで、よりリズム感のあるほうへ」¹⁶向かっていることである。したがって、マケット以前に、教科書版のような長いバージョンが存在したと考えにくい。

このストーリーの発案者である妻のセシルが書いたのではないかと考えたが、そのような事実はなかった。あるいはまたプーランクが作曲した「ぞうのババール」との関連があるのではないかと調べてみたが、プーランクがこの物語に音楽をつけようと考えたのは1941年、曲が完成したのは1945年であり、ジャン・ド・ブリュノフの没後である。

15 <https://www.themorgan.org/collection/Histoire-de-Babar-Maquette/26>

16 Les brouillons de Morgan Library donnent à lire le cheminement de Jean de Brunhoff vers une écriture toujours plus simple et toujours mieux rythmée.

Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar, Les albums de Jean de Brunhoff*, Presses universitaires de Rennes, 2017, p.35.

初版、マケット、教科書版の結末の比較

1931年に *Histoire de Babar*、1932年に *Le voyage de Bababr*、1933年に *Le roi Babar* と毎年一作ずつ発表されているという事実から、*Histoire de Babar* が好評を博したので続編が書かれ、さらにその続編が書かれたと考えられがちである。しかし、*Histoire de Babar* とそのマケットの最終ページを比較すると、ジャン・ド・ブリュノフがすでに *Histoire de Babar* の出版前から後に発表される2作品の構想していたことがわかる。

マケットの最後のページにはこう書かれている――

「これが、ババール I 世とセレスト王妃の戴冠式の日のようすです。〈仔象のババール〉のお話はこれでおしまい。でも〈おうさまババール〉のお話を読むとこの先ババールがどうなるかがわかりますよ¹⁷⁾」

マケットのこの文は、つづきを知りたいければ「おうさまババール」を読むべしという読者へ予告であり、実際に「おうさまババール」は1933年に3作目として出版される。

一方、1931年の初版本は、戴冠式と結婚式のあと、ババールが気球に乗って新婚旅行にでかける場面で終わる。「おうさまババールと おきさきのセレストは きいろい りっぱな ききゅうにのって しんこんりょこうに でかけた。さて これから どんなことがおこるだろう」(絵本版 p.52、矢川訳 p.48)

そしてこの最後の場面がそのまま、1932年に出版される第2作 *Le voyage de Babar* の表紙となり、物語は続いていく。つまり、ジャン・ド・ブリュノフの構想ではまず「ババールのおはなし」と「おうさまババール」があり、そのあいだに第2作「ババールのしんこんりょこう」があとから挿入されていることがわかる。

教科書版の最後のページは、結婚式の舞踏会のあと、「すべてが眠っています」という文で終わっている。前述のとおり、教科書版には「ババールのおはなし」は『ババールの冒険』という本の第1章であるというコピーライトの記載があっ

17 Le roi Babar I et la reine Céleste tels qu'ils étaient le jour de leur couronnement. Ici finit l'histoire de Babar le petit éléphant, mais vous pourrez savoir ce qu'il devient en lisant l'histoire du roi Babar.

た。『ババールの冒険』はババールの初期3冊を1つにまとめた本で、第1章が「ババールのおはなし」、第2章は「ババールのりょこう」、第3章は「おうさまババール」という3章からなる本であると推測できる。

3.2 『ババールの冒険』

この『ババールの冒険』という本は、どんな本なのだろうか？

この疑問は、私の思ってもみなかったかたちで解決した。ババール3部作を一冊にまとめた長いバージョンの本についての言及は、2011年の*Les Histoires de Babar*に収められたヴェロニク・スレによる論考にあった——1959年、アシェット社の有名なビブリオテーク・ローズ・シリーズから、『ババールの冒険』が出版される。ロラン・ド・ブリュノフによる翻案で「ババールのおはなし」「ババールのりょこう」「おうさまババール」の3作を小説化した190ページの本である¹⁸。

日本での教科書版の初版は1962年なので、年代的にも、1959年に出版されたこの本を底本としている可能性は高かった。さらにニエレス・シュヴレルの著作*Au pays de Babar*¹⁹では、この小説化された本とオリジナルの冒頭の文章が比較されていた。引用されたノベライズ版の冒頭の文章は、教科書版の文章と完全に一致しており、これが教科書版の元になっていることはほぼ確実となった。

さいわい入手できたこの本（1974年版）には、表紙にはジャン・ド・ブリュノフの名前があり、表紙をめくった中表紙に「ロラン・ド・ブリュノフ翻案による文と絵」と記され、ニエレス・シュヴレルの記述のとおりであった²⁰。もう少し詳しく説明すると、表紙には車に乗ったババールの絵とともに、*Les Aventures de Babar par Jean de Brunhoff*（ジャン・ド・ブリュノフによる『ババー

18 Véronique Soulé, «Babar, un héros toujours d'actualité ?», in *Les Histoires de Babar* (sous la direction de Dorothée Charles), Les Arts Décoratifs/Bibliothèque nationale de France, 2011, p.113.

19 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar*, *op.cit.*, p.290.

20 *Ibid.*, p.290.

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐる ―ふたつの版、翻訳、教材として― (堀内ゆかり)

ルの冒険』)と書かれていて、表紙にはロランの名前はない。中表紙ではジャンの名前とタイトルを繰り返し、タイトルの下に「ロラン・ド・ブリュノフ翻案による文と絵²¹」と記され、表紙とは別の、頭にさるを載せたぞうの絵がある。この絵はまさしく教科書版の表紙の絵と同じものであった。

今の感覚からすると、このような名前の表記の仕方は原作者が尊重されていないように感じられる。この点については、以下でブリュノフ家とアシェット社の関係から考察する。

まず、この本はどのような目的で作成されたのだろうか。

「アシェット社はひとりで本を読める、少し年長の読者向けに、絵を減らし、ババール3部作をリライトしたミニ小説を作る企画²²」を立てた。

名作を平易な言葉で書きかえるシリーズはフランス語にかぎらずどの言語でも存在し珍しくないが、それとは逆方向で、年少者向けの絵本を〈嵩増し〉するという、私の想定外の発想だった。

ミニ小説版と教科書版の相違点

「ミニ小説版」の第一部 *Histoire de Babar* と「教科書版」を比較してみよう。章立ては同一で、*Babar dans la grande forêt* (大きな森のババール), *Babar à la ville* (ババール街へ行く), *Chez la vieille dame* (老婦人の家で), *Arthur et Céleste* (アルチュールとセレスト), *Le roi des éléphants* (象の王様) の5つの章に分かれていて、文章も同一である。挿絵に関してはミニ小説版では、カラーページも含めて全部で13点あるが、教科書版では挿絵は各章に1点ずつ、すべて白黒で全部で5点だけである。

ミニ小説版から教科書版が作成される過程で省略された挿絵には、オリジナルに手を加えたものもあった。「ロラン・ド・ブリュノフによる翻案(アレンジ)」であり、最も大きな描き換えはつぎの場面である。絵本版 pp.24-25 では見開き

21 Texte et dessins adaptés par Laurent de Brunhoff.

22 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar, op.cit.*, p.289.

2 ページでババールが田舎で自動車に乗っているシーンがあるが、ミニ小説版では1 ページ全体の挿絵になっている²³。絵本版では少女は完全な後ろ姿で立っているのに対し、ミニ小説版では、少女の横顔が見え、ババールに向かって手を振っている。これは、前述のババールがシルヴィーという名の少女と親しくなって一緒にドライブに出かける場面であるが、このエピソードにさらに適応するよう、挿絵が描き換えられていたのである。

「切り刻まれて」

このようにジャン・ド・ブリュノフの作品にアレンジを加えることは、ババール関連の書物では実はめずらしいことではなかった。「ババールはパテ用ひき肉のごとく切り刻まれて²⁴」という章のタイトルが示しているように、ジャン・ド・ブリュノフの作品には「煉獄²⁵」の時期があった。可能なかぎり多くの読者獲得を目的とする出版社の意向で、大型本の余白を削られたり、一冊の本を2、3に分けて小型本で出版されたり、ポップアップ絵本を作成したりなどの改変が行われた。*Histoire de Babar* の冒頭、ババールの母親がハンターに撃たれて死ぬ場面の絵が省かれることもあった。ミニ小説版の出版も、こうした改変の流れのなかに位置づけることができるだろう。

アシェット社との関係は、そもそもはジャン・ド・ブリュノフ側が望んだことであった。1931年、*Histoire de Babar* の出版の際、アシェット社に打診したがアシェット社はこの本の判型の大きさと高額な価格に恐れをなして実現せず²⁶、結局、絵本出版の経験のないジャンの義兄のジャルダン・デ・モード社から刊行されるという経緯があった。その後、ジャン・ド・ブリュノフの絵本の売れ行きが好調だったため1936年、配給網をもつアシェット社に権利が譲渡さ

23 Jean de Brunhoff, *Les Aventures de Babar*, texte et dessins adaptés par Laurent de Brunhoff, Nouvelle bibliothèque rose, Librairie Hachette, 1959, p.27.

24 Babar haché menu comme chair à pâté. Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar, op.cit.*, p.287.

25 *Ibid.*, p.287.

26 Carine Picaud, «Babar en famille », in *Les Histoires de Babar,op.cit.*, p.26.

れることになる。ジャンが結核で亡くなる前年のことであった。

1937年、ジャンが亡くなったとき、長男ロランは12歳で、すでに絵を描くことが好きだった。死後出版となる2冊 (*Babar en famille* と *Babar et le père Noël*) はイギリスの新聞デイリースケッチ紙に白黒で連載されていたものに彩色されて出版されたが、そのときジャンは親権者となった叔父のすすめに従い、彩色作業をするメンバーに加わっている²⁷。

その後、第二次大戦(1941-1945)からババールの大型本の売れ行きは芳しくなかった。大戦後、アシェット社からジャンの妻セシルに対して、ババールシリーズを第三者の手で継続することの可否について打診があったという。セシルは即座に拒否し、それならば息子のロランがババールを引き継いだほうがいいという決断から1946年、新作 *Babar et ce coquin d'Arthur* が出版されることになった。

ジャン・ド・ブリュノフのオリジナル作品への回帰の機運が高まるのは、1970年代中頃からである。それまでの間、息子ロランによるババールの絵本が15冊以上出版される一方で、ロランの名前は、さまざまな改変を正当化するための〈お墨付き〉として利用されてきたのである²⁸。

ジャンとロランの名前について、「どちらか一方の名前であれ、あるいはその両方であれ、著者名が明記されていても、今日出版されている絵本は、オリジナル作品とは全く関連がないことが多い²⁹」。現在はババールのテレビのアニメ番組や幼児雑誌もあり、ライセンス契約でアニメから翻案された本³⁰では絵も新しく描き直されているという。こうした原作からかけ離れた作品群を考えると、本稿で検討してきたアシェット社の *les Aventures de Babar* は、表紙にはジャンの名前しかないが中表紙には「ロランによるアレンジ」であることが明記されていること、ジャンによるオリジナルの文章はほぼすべて活かして、そこに文

27 ロラン・ド・ブリュノフによるあとがき。Jean de Brunhoff, *Histoire de Babar le petit éléphant, les lutins de l'école des loisirs*, Librairie Hachette, 2016.

28 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar, op.cit.*, p.291.

29 Véronique Soulé, «Babar, un héros toujours d'actualité ?», in *Les Histoires de Babar, op.cit.*, p.113.

30 ネルバナ社

章が付け加えられていること、当時の状況を考え合わせると許容範囲内の改変だと言えるのではないだろうか。

日本での教科書版の存在意義

Les Aventures de Babar は本国フランスでは今はもうビブリオテーク・ローズのラインナップにはなく古書としてしか流通していないが、その第一章が日本で購読用の教科書として読み継がれている。教科書版『仔象のババール』はおそらく、こうした改変の事情を知った上で、教材としての価値があるという編者の判断から出版されたのだと思われる。そして1962年刊行以来この教科書が版を重ねている³¹のは根強い人気の表れであろう。

絵がメインの絵本版では、購読の授業用の教科書にはなり得なかつただろう。「おしゃべりなりライトでテキストを膨らませている³²」という批判はあるにせよ、書き加えによって物語の内容は詳しくなり、文法のレベルも高まり、それでいて読みやすいテキストになっている。本を読み始めたばかりの子供が興味をもって読みながら国語力をつけられるようにという配慮は、初級文法を終えた外国語学習者向けの購読用テキストの目的と合致したと言えるだろう。

ジャン・ド・ブリュノフの再評価

授業で使った絵本版 *Histoire de Babar* は、1979年にエコール・デ・ロワジュール社から出版された。世界の児童文学の名作の発見・再発見することを目的とした *Lutin poche* という廉価な小型本シリーズでの一冊で、*lutin* とは〈いたずら好きの小さな妖精〉を意味する。同社がジャン・ド・ブリュノフの6作品³³の小型版での出版許可をアシュット社に申請すると、「予想に反して許可が下りた³⁴」という。

1979年に初期の3作が、残りの3作も1980年と81年に出版され、巻末には

31 2018年20版。

32 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar, op.cit.*, p.290.

33 abcを学習するための *ABC de Babar* を除く6作。

34 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar, op.cit.*, p.298.

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐる ―ふたつの版、翻訳、教材として― (堀内ゆかり)

大人の読者向けに息子ロラン・ド・ブリュノフによる「あとがき」も添えられた。

廉価版の6作は好評で、それが大型本の出版にもつながり、アシェット社で再版されていなかった2作 *Babar et le Père Noël* と *Les Vacances de Zéphir* が初版当時の大きさで出版された。

このようなジャン・ド・ブリュノフ再評価に合わせて、1981年には「ババール生誕50年」展がパリで開催された。その後2011年の生誕80年に開催された展覧会ではカタログ *les Histoires de Babar* も刊行されている³⁵。

3.3 *Histoire de Babar* の翻訳

日本における *Histoire de Babar* の翻訳は複数ある。

現在、入手しやすいのは矢川澄子訳『ぞうのババール』で、評論社から1974年に出版された。A4サイズの普及版と、「フランスではじめて出版されたときと同じ判型の超大型絵本」であるグランド・アルバム（1987年刊）がある。矢川訳の特徴は、横書きで、文体が常体であること、絵に描き込まれた文字も訳されていることである。たとえば原書の *Grand Magasin* は〈デパート〉、*Pâtisserie* の看板は〈きっさ・ケーキ〉となっている。

日本におけるこの本の最初の翻訳は1949年に石邨幹子訳で世界文学社から出版された。1931年フランスで初版刊行後、米、英、独のあと、北欧4カ国（デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー）が続き、日本は9カ国目、全36カ国・地域でかなり早い時期に翻訳されている³⁶。タイトルは『象ちゃん ババールのおはなし³⁷』で、フランスの初版と同じ表紙、ページ割りである。絵に描き込まれた *Opéra* 等の文字はそのままで、文章は横書き、敬体である。サイズはA4版よりやや小ぶりである。見開き扉には、以下の文がある。「この絵本は最近フランスの子どもの間で大歓迎を受けている冒険続き物の第一冊です」。アメリカでも大人気であることが書かれたあとで、「このたび アメリカの C・I・

35 François Bistnavaron, «Babar, 80 ans et toujours vert», *le Monde*, 8 décembre 2011, art.cité.

36 Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar*, op.cit., p.308.

37 ジャン・ド・ブリュノフ、石邨幹子訳、『象ちゃん ババールのおはなし』、京都、世界文学社、1947年。

E 推薦図書として日本で翻訳が許可されたことを日本のこどもたちのために大いに喜びたいと思います」(原文ひらがな)。CIE とは第二次大戦後の連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ/SCAP) 民間情報教育教育局 (CIE) のことであり、その管轄下に図書館が設置されていた。このことから、この本はアメリカ経由で日本に紹介されていることがわかる。出版社はジャルダン・デ・モード社の表記がある³⁸。

1956年には岩波書店から鈴木力衛³⁹訳の『ぞうさん ばばー⁴⁰』が出版されている。「岩波の子どもの本」のシリーズの一冊で、判型はこのシリーズで統一された小型 (20.5 × 16.5) である。縦書き、右開きであり、それに合わせるため、原書を尊重しつつも、トリミングされたり、絵が反転されたりしている。漢字とカタカナはなく、すべてひらがなで、敬体を用いられている。Grand Magasin は〈でぱーと〉、Pâtisserie の看板は〈ぱん・けーき〉となっている。

せなあいこ訳『ババールのおはなし』は、17.8 × 12.2cm の小型本で「ババールのポケット・ブック」6冊セットとして1994年に刊行された。表紙にジャン・ド・ブリュノフ原作と明記されているとおり、本書は短縮されたヴァージョンである。ページ数は44ページで原書とほぼ変わらないが、小型本のため原書で1ページのものを2つに分けている箇所もあり、そのぶん省略されているページも多い。ババールの母象がハンターに撃たれる場面と倒れる場面は省略され、文でも「死んだ」という言葉は使われていない。また、いとこのアルチュールとセレストはいとこ同士で、二頭を街に探しにきたのはそれぞれの母という本来の設定が、この本ではアルチュールとセレストは姉弟であり両親が街にきたことになっている。文章は横書きで、ごく簡単な漢字、ひらがな、カタカナが使われ、文体は敬体である。デパートとケーキ屋の看板に関しては、絵そのものが省略

38 Editions du Jardin des Modes, groupe des Publications Condé Nast.

39 鈴木力衛はモリエール研究で知られ、学習院大学フランス文学科を築き上げた。

40 ジャン・ド・ブリュノフ、鈴木力衛訳、『ぞうさん ばばー』、『岩波の子どもの本』、岩波書店、1956年。

Histoire de Babar『ぞうのババール』をめぐって ―ふたつの版、翻訳、教材として― (堀内ゆかり)

されている。

こうして4つの翻訳を比べてみると、日本語に翻訳する際の選択肢の多さに気づく。文体を常体にするか敬体にするか、縦書きか横書きか、表記を漢字にするか、ひらがな、カタカナにするか、漢字にルビをつけるか。さらには、象ちゃん、ぞうさん、ぞう、動物をどう呼ぶか。

4人の訳者に同じ箇所がどう訳されているか、一例を挙げて比較してみよう。実際に授業で訳したとき、学生が苦勞した箇所のひとつである。母象がハンターに撃たれたあと、森を逃げ出して街にたどりつき、目新しいものを目にする場面である。

Pourtant ce qui intéresse le plus Babar, ce sont deux messeieurs /qu'il rencontre dans la rue.

Il pense :« Vraiment ils sont très bien habillées. Je voudrais bien avoir aussi un beau costume..... » (絵本版 p.14)

でも いちばん ババールの^め目に ついたのは /みちで であった /ふたりの しんし でした。

「あのひとたちは ほんとに きれいな なりをしてる。 /ぼくも きれいな きものが ほしいなあ」 (石邨幹子訳、1949年)

でも ばばーるが、なによりも おもしろく おもったのは、まちで あった ふたりの りっぱな しんしでした。

ばばーるは、かんがえました。

「なんて すばらしい ようふくを きているんだろう。 /ぼくも あんな ふくが ほしいなあ。」 (鈴木力衛訳、1956年)

でも いちばん おもしろかったのは /まちかどで であった ふたりの しんしだった。

「にんげんって ふくをきて すてきだなあ / ぼくもひとつ あんなのを
きてみたいもんだ。」

(矢川澄子訳、1974年)

みちの まんなかで、 ババールは / ふたりの しんしを みかけました。
「わあ みんな なんて ちゃんとした / みなりを してるんだろう。」

(せなあいこ訳、1994年)

洋服、服の意味で石邨訳では「きもの」が使われているが、現代では意味がずれて「きもの」は和服を指す語になっていることに気づく。また時制に関しては、原文では現在形 (ce qui intéresse le plus Babar ババールが最も興味をもつのは) が用いられているが、この箇所は日本語では現在形にすると座りが悪く感じるケースである。

つねにある問題として、人称代名詞をどう訳すかを選ばなければならないし(「ぼく」)、人称代名詞を省略することも選択肢となる。ils sont を「彼らは」と訳すのは不自然で、それぞれの訳に工夫が見られる。bien habillés という語は学生にはイメージしにくい、オペラ座の前にいるという状況から、観劇に行くときのような服装だと説明することもできるだろう。

意味が通じるときには省略も可能であること (Il pense 彼は考える)、最後の二文では bien habillé (みなのいい) と beau costume (立派な服) で意味が重なるので、一文ずつ訳すのではなく、ふたつの文を合わせて全体的に対応するように訳すこともできる。

授業では矢川訳を参考として学生に紹介してきた。「にんげんって ふくをきて 素敵だなあ / ぼくもひとつ あんなのを きてみたいもんだ」は、大胆だが原文の意を汲んだわかりやすい訳の好例だと言える。

4. むすびに代えて

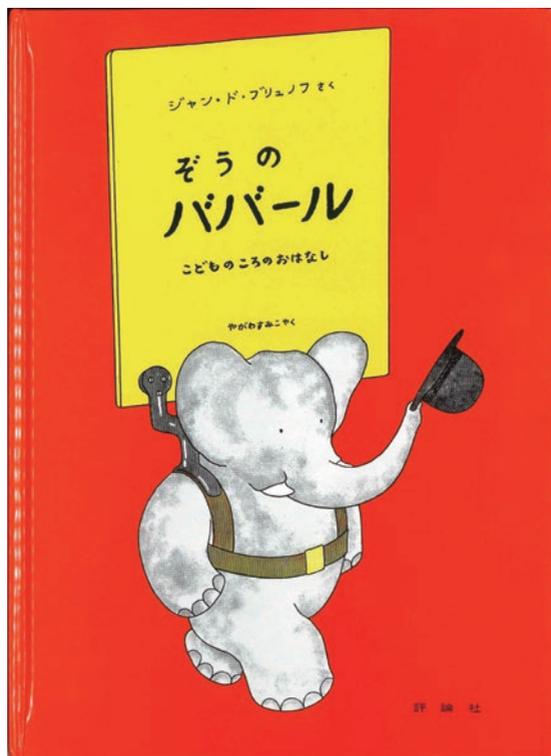
子供向けの本を教材にすると簡単すぎるのではないか、簡単なものはひとり

でも読めるだろうから、授業で読むなら少し難しいテキストを選んだほうがいいと私も考えていた時期があった。しかし、簡単すぎるように見えるテキストでも、実際に日本語に訳そうとすると、思いがけないところが難しことが度々ある。そのような箇所も、子供向けの文章なのだから理解できるはず、という前提で読めるのが絵本のいいところだろう。内容が難しい文だと外国語を解説する難しさと相まって意味不明になり、理解した！ という実感を持ってないこともある。

辞書を使って自分の読みたい文を読めることを購読の授業の目的とすれば、そこに到達する前のステップとして児童文学は有意義な教材になり得るだろう。テキストをひたすら読んで訳していくのが通常の購読の授業であるが、この『ぞうのババール』に関しては、テキストのほかに絵があり、ふたつの版が存在する。さらにプーランクによる音楽劇の音楽と朗読があり、日本語訳もある。これら複数の媒体を用いて学生の理解を深めることができるのがこの本の利点である。

実際の授業で使ったのは2020年度、コロナ禍で授業がすべて遠隔になった年であった。中級リーディングのクラスでは「ミニ小説」である教科書版を用い、絵本版の絵をヒントとして提示した。フランス語圏文化学科の学生向けのクラスでは「絵本」版をメインのテキストとして筆記体の解説、直訳、意識をし、話の理解を深めるために教科書版を使った。どちらのクラスも、学生にはLMS(学習管理システム)を通じて課題を事前に提出してもらい、ZOOMも利用した。1年間で1冊を読み切ることの達成感があるという感想が多かった。

2021年はババール誕生から90周年。10年後には100周年を迎える。関連書籍の出版も増えるだろう。本稿では触れられなかったジャン・ド・ブリュノフの植民地主義とその批判について、安易な改変にみられる児童文学における著者の概念について、またジャン・ド・ブリュノフの影響を受けた作家たち(センドック、ウンゲラー、ソロタレフ)についても研究を継続していきたい。



『ぞうのパジャマ』 矢川澄子訳、評論社の表紙

参考文献

- Jean de Brunhoff, *Histoire de Babar le petit éléphant*, les lutins de l'école des loisirs, Librairie Hachette, 2016, 1979 (初版: Ed. du Jardin des Modes, 1931).
- Jean de Brunhoff, *Le voyage de Babar*, Librairie Hachette, 1979 (初版: Ed. du Jardin des Modes, 1932).
- Jean de Brunhoff, *Le roi Babar*, Librairie Hachette, 2004 (初版: Ed. du Jardin des Modes, 1933).
- Jean de Brunhoff, *Les Aventures de Babar*, texte et dessins adaptés par Laurent de Brunhoff, Nouvelle bibliothèque rose, Librairie Hachette, 1959.
- Jean de Trigon, *Histoire de la littérature enfantine : de Ma Mère L'Oye au Roi Babar*, Librairie Hachette, 1950.
- Ann Meinzen Hildebrand, *Jean and Laurent de Brunhoff, the legacy of Babar*, Twayne's World Authors Series, Twayne Publishers, 1992.
- Les Histoires de Babar*, sous la direction de Dorothee Charles, Les Arts Décoratifs/Bibliothèque nationale de France, 2011.
- Dictionnaire du livre de jeunesse : la littérature d'enfance et de jeunesse en France*, sous la direction de Isabelle Nières-Chevrel et Jean Perrot, Editions du Cercle de la librairie, 2013.
- Isabelle Nières-Chevrel, *Au pays de Babar: les albums de Jean de Brunhoff*, Presses universitaires de Rennes, 2017.
- Yseult Williams, *La Splendeur des Brunhoff*, le Livre de Poche, Fayard, 2018.
- ジャン・ド・ブリュノフ作、矢川澄子訳、『ぞうのババール こどものころのおはなし』、評論社 1974年。
- ジャン・ドゥ・ブリュノフ作、鈴木力衛訳『ぞうさん ばばーる』、「岩波の子どもの本」、岩波書店、1956年。
- ジャン・ド・ブリュノフ作、石邨幹子『象ちゃん ババールのおはなし』、世界文学社、1949年。
- ジャン・ド・ブリュノフ原作、せなあいこ訳『ババールのおはなし』、「ババ-

ルのポケット・ブック①」、評論社、1994年。
石井桃子談話集「子どもに歯ごたえのある本を」、河出書房新社、2015年。
鹿島茂コレクション「フランス絵本の世界」展カタログ、青幻社、2017。
高輪沙羅、『「ぞうのババール」ものがたり』、NHK出版、2003年。

参考資料

参考サイト

Jean de Brunhoff, *Histoire de Babar : le petit éléphant*, Editions du Jardin des Modes, 1931.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k96582907/f2.item?lang=EN#>

Jean de Brunhoff's *Histoire de Babar Maquette*, The Morgan Library & Museum.

<https://www.themorgan.org/collection/Histoire-de-Babar-Maquette/26>

CD

ジャンヌ・モロー（語り）、ジャン＝マルク・ルイサダ（ピアノ）「ぞうのババール」解説、テキスト『プーランク ぞうのババール、サティ ジムノペティ、グノシエンヌ他』、1994年、ポリドール。

プーランク作曲、ジャン・ド・ブリュノフ台本 / 矢川澄子訳、音楽物語『ぞうのババール』忌野清志郎（語り）、高橋アキ（ピアノ）2012年発売。録音1986年。EMI Music Japan.

Histoire de Babar de Jean de Brunhoff — deux versions, traduction, manuel —

HORIUCHI Yukari

En cours de lecture (中級リーディング), le choix du texte est important. Par hasard, je suis tombée sur un manuel de Babar destiné aux étudiants japonais. Il s'agit de “*Histoire de Babar*”, publiée en 1962 par Daisan-Shobo. Curieusement, ce texte était différent de celui du célèbre livre d'images portant le même titre. Pourquoi y a-t-il deux versions différentes ?

Dans cet article, nous partons de cette question et analysons ces deux versions. *Histoire de Babar* est le premier livre de la série Babar publié en 1931. Il continue encore aujourd'hui à être lu et aimé par les enfants. L'édition du manuel comporte moins de dessins, un texte plus long et des descriptions plus détaillées. Cette édition a été publiée originairement en France en 1959 dans la collection « Nouvelle bibliothèque rose » chez Hachette, pour « attirer des lecteurs autonomes et un peu plus âgés » (Isabelle Nierès-Chevrel, *Au pays de Babar*).

Ces deux versions permettent de lire le livre sous de nombreux angles. En plus de la difficulté modérée du texte, du niveau de vocabulaire, et son accessibilité, l'*Histoire de Babar* est très riche en adaptations et en supports : dessins, partition de Poulenc, plusieurs traductions japonaises. Selon moi, *Histoire de Babar* pourrait être un manuel idéal.